

榊原本八幡の本地(下)

— 影印、翻刻 —

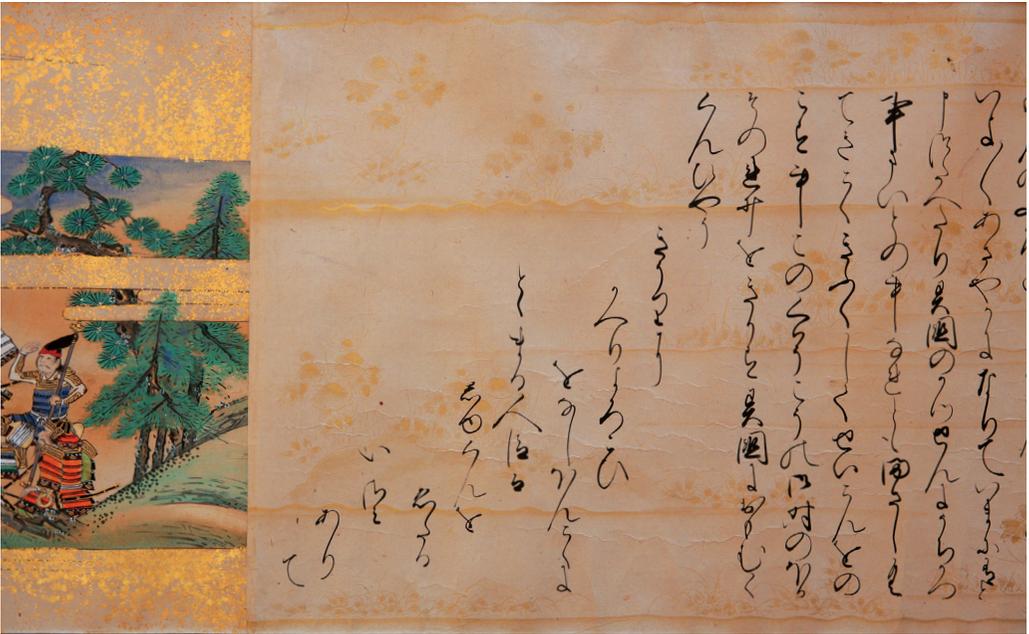
黒田彰
坪井直子
筒井大祐

〔抄録〕

八幡縁起は古代、中世に流行した八幡信仰を背景とする縁起絵巻で、北野縁起などと共に我が国の社寺縁起を代表する絵巻の一である。小稿では従来、甲乙類に分類される八幡縁起絵巻の乙類に属すると見られる新出資料、愛知県刈谷市の榊原家の所蔵に掛る、八幡の本地二巻をカラー影印、翻刻により紹介する。本号に収録するのは、その下巻で、本誌前号(95号)収録の上巻に続くものである。榊原本の書誌的事項や翻刻の方針などについては、

前号の略解題を参照されたい。なお『京都語文』18号(平成23年11月)には、同じ八幡縁起絵巻甲類の新出資料、鰐鳴八幡宮本八幡大菩薩御縁起(上下巻)を紹介したので、併せての参照を乞う。

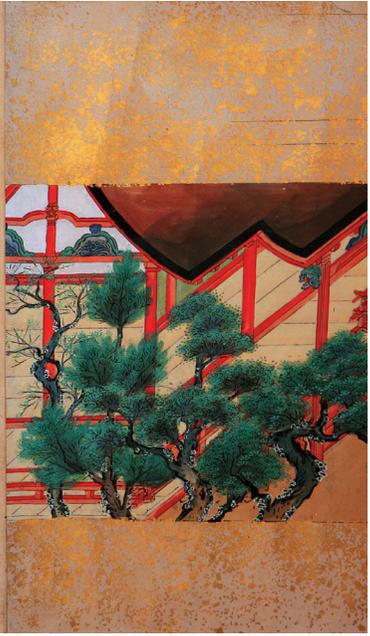
キーワード 八幡はちまんの本地ほんぢ、八幡縁起はちまんえんぎ絵巻えまき、社寺縁起しゃじえんぎ、奈良なら絵巻えまき、御伽草子おとぎそうし





神原本 八幡の本地(下) (黒田 彰・坪井直子・筒井大祐)





今より三十八年かゝるに
 十二年正月より始りて
 ありしは、御ふとまのつら
 依のつらりまんとすけ
 小のつらりまんとすけ
 神ひさこふとまのつら
 りのつらりまんとすけ
 中一二年より此のつら
 りのつらりまんとすけ
 一より三三年のつら
 りのつらりまんとすけ
 一より三三年のつら
 りのつらりまんとすけ

佛教大学 文学部論集 第九十六号 二〇一二年三月

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十





神原本 八幡の本地(下) (黒田 彰・坪井直子・筒井大祐)



「八幡の本地下 翻刻」

扱しんらはくさいかうらいのこくわう

大臣みなかうをこふてわれら日本の

いぬとなりてしゆこすへし毎年み

つき物をそなへてまつたくけたいすへ

からすとてせいこんをたてゝ引しり

そきけりさるほとに異国のけうと

ことゝくきふくしててきしん

なすもの一人もなかりけりくはう

こうしんらの地に付給ひすなはち

はんしやくの面に弓のはつにてしん

らこくの大王は日本の犬なりといふ

めいをかきつけて御ほこを国のわう

宮の門前にたてをきて御きてう

ありいまの世にいぬをもといふ事

はかの国の人民を犬にかたとりて

てきくんをいるひやうしなり日本

のくわんくん引しりそきてのち末

代までの国のはちとて火をもつてか

の石の文やきうしなはんとすれとも

いよゝあさやかになりていまに有と

申つたへたり異国のかつせんにうちかつ

事まいとの事なれともまさしく

てきこくきふくしてせいこんをの

こす事このくはうこうの御時のほか

そのれををきかす異国におもむく

くんひやう

きうりに

かへりよろこひ

をなしほんこくに

とゝまる人臣は

しゆくんを

ゑたる

いさみ

あり

て

図一

さてかの二つのたまをはひせんの国

さかのこほり河上の宮におさめを

かれけるとなりかんしゆといふは色し

ろくまんしゆといふは青いろの玉をの

く長き五寸はかりの玉なりくはう

こういこくにおもむき給ひし時せん

くわうの御体御くわんに入てかしの

はまにすへたてまつりをき御まほり

とおほしめしけるをくわんかうの

のち武内大臣してなかとの国とよ

らの宮におくりたてまつりそれより

して河内の国長野山にうつし奉りて

山陵をつき給ふくはうこうはちくせん

の国にくわんしやうくし給ひてのち

十日と申にうの羽をもつてうぶ屋を

つくり槐木をさかさまにたてゝ取

つかせ給ひてわうしをうみたてま

つり給ふかの木やかておいつきいまに

ありかのところをうみのみやとなつて

たてまつり

御たんじやうは

十二月十四日

辛卯たんじやうゑ

といふ

神事

おこなはるゝ

事

この

ゆへ

なり

図二

次の年二月にたけうじしくねをわうしにあひともなひたてまつりてみやこへのほせ給ふほとにかこさかのわうしをしくまのわうし兄弟二人くわうこうの御はらにわうしいてき給へることをそねみてつはものをあつめてひそかにまち給ふよし聞えしかはたけうちのしくねわうしをいたきたてまつりてなにかいよりきいのみなとにつき給ふ其後たけうち大臣かの兄弟のわうしをついはつしかこさかをしくま兄弟の御子と申はちうあいて天わうの御子大ほさつの御ためには御兄にてまします神功皇后はかいくわてんわう五世の御まこ御年三十一と申十月二日ちうあい天わうの御ゆいこんにまかせてつゐに天子の位にいたり給ふ御治世六十九年御とし一百歳と申せし四月十七日に大和の国たかいちのこほり磐余稚桜宮にしてほうきよをはんぬのちには神とあらはれ給ふ八まん大ほさつ三所のうちひかしのこせん

と申はずなはちこの御事也わうしは四さいにしてくはうたいしにたゝせ給ひ御年七十一と申正月に皇居にかはりたてまつり帝位にそなはり給ふすなはちおうしん天わうとかうしたてまつりちうあいてんわう第四の御子なり御治世四十一年きさき八人なん女の御子十九人此御代にはしめて文字をかきいしやうはしまると見えたり御とし百十一にして大和の国たかいちのこほりかるしまとよあきらの宮にてほうきよをはんぬ神にあらはれ給ひて八まん大ほさつとかうしたてまつるちくせんの国にましゝ七郡かうちかすや西郷といふところにちやうゑのはこをうつししるしの松是なり其後又ふせんの国宇佐のこほりましろのみねにてせきたい権けんとあらはれ給ふこれすいしやくのはしめなりすなはちかの山のいたゝきに三つの石となりてその石よりこんしきのひかりをはなち其ひかりわうしやうをさすこれによりてにとく天わうにちよくしかの山によちのほりてみればこんしき

のたかとけんし給へりちよくし山のふもとにてほうてんをつくりあかめ給ふなりうさ八まん大ほさつとかうしたてまつる事はこさきのしるしの松のふもとに空より八流のはたふるあかはたなかれしらはた四なかれ也すなはちしやたんをつくりこれをあかめたてまつるそれよりして正八まん大ほさつと名つけたてまつるこれすなはち

八正ちきろ

のしめしと

三有の

くかいを

すくひ

たまふ

ひよう

し

なり

図三

人わう三十代きんめい天わうの御宇十二年正月にはしめてしんたいを

あらはし給ふすなはち豊前の国宇

佐のこほりれんたいし山のふもとた

におくにかちするおきななり太

神ひきこれを見るにそのかたちかほ

はせきにしてたゝ人にあらすはか

のひきろうきよしてきうしする

事三年たちまちに五こくをたんし

しやうしんして御へいをさゝけいのり

申やう我三年の間きうししたてま

つる事御そうかうたゝ人にてましま

さゝるによりて正御体をはいけん

せんかためなりもし神明にてまし

まさはねかはくはわかまへにあらはれ

給へとねんころにぎせいし奉りしか

はたちまちに三さいのせうとけんし

竹の葉にのりてしめされていはく

我は日ほん国主人わう十六代誉田の

天わうなりわれをはこゝくれいけ

むゐりきしんつう大しさいほうさ

つといふなり国々ところゝにあと

をたれあらはるゝ事久しとのた

まひてまことにくの御せいやくよ

しやにかはりてちんりにまします

されは御たくせんの中には人の国よ

り我か国他の人より我か人と云御

ことはありわか国に生をうけて

む人たれか大ほさつの御めくみをへさ

らんやむかしは六年に一度ちよくし

を宇佐へたてゝ国のまつりことをさ

ため給ふへきよし

申されけるに

御てんより

御こゑを出して

御返事あり

けると
なり

図四

しかるにせうとく天わうゆけのたう

きやうせんしにせんそあるへきむねわ

けのきよまろをちよくしとして

うさの宮に申させたまひければ

大くわんをなすしかるにかゝるひれい

を聞事さらに我ほんるにあらす

ことはを出すゆへにこそかゝるひたう

の事をもきけ今よりのちはちよく

しなれはとて返事する事あるへ

からすとの給ひてきよ丸きさんして

此よしをそうもんするにみかとしん

りよのゆるし給はさる事をはゝか

りとおほしめしてせんそはなかり

けれともきよ丸あしく申たりけれ

はこそ御ゆるしなればとてかの

二つのあしをきりてうつほふねに

のせてなかさるこの舟うさのはまに

よりたれはかのしゝ来りてきよ丸

をのせてうさの宮のなんろうにいた

りしかはこれをひとへに大ほさつ

の御めくみなりとおほしめして

かのしゝよりておりて御てんちかく

まいりてなみたをなかしけれ御てん

のうちよりやことなき御こゑにて

ゆきつゝも来つゝみれともいさきよき

人のこゝろをわれわすれめや

きよまろこれを聞いていよゝしん

きやうをいたすところにはうてんよ

り五しきの小蛇せうじやはい出てきよ丸

かもゝをねふるにもとのことく足二つおへ

出てけりきよ丸きいのあまりに

一のからんをたてゝほうみをそなへ

たてまつりけんといふくわんをおこ

すところになんち男山にこんりう
すへしとつけ給ひしかはやわた山の
おくにからんを立てみるくぼさつを
あんち奉りすなはち足立寺と
なつけたり和氣の氏寺としていま
に有となんちやうくわんの比行けう
和尚といふ人宇佐の宮に弐千日さん
ろうして大はんにやほつけ大せう
経をしゆし

しんこんの

ほうみをさゝけ

たてまつるに

大ほさつ此上人の

ほうみをたつとみて

たくせんしてのた

まはく

図五

さきの松のもとにかいちやうゑのはこそ
うつみ給ふ事をしめし給ふおしやうす
なはちかしこにまふてゝかの松のもとに
みかきをしめくらすこれよりして
しるしの松といふ事をはみな人しり
たりけり清和天わうの御宇ちやう
くわん十八年七月十五日の夜半にひそか
に行けうにしめし給ふやうなんちに
ともなひてわうしやうちかくちんさして
こくわうをしゆこし奉るへしとの給ひ
ければおしやういつれのところにまし
ますへきと申わうしやうのみなみおと
こ山をさして御さいしよとすへきむね
をおしへ給ふすなはち行けうの上衣に
弥陀の三そんあらはれ給ふ和尚すなは
ちかの山にしやたんをかまへてこれ
をあかめ奉り行けう心中におもひ
けるは此山はひろしいつれのへんにか

図六

ましますへきとなけきをなすところ
にいはいし水のへんに三本のさか木生
へたり和尚すなはちこれをもつて御
やうかうのみきんとさためけるをよそ
わかつてうにそうへうしんおほしといへ
ともことに異国をかうふくのせいやく
をたてゝてうていをまほり万民を
めくみ給ふ事ひとへに大ほさつの神
りよにありたゝし御たくせんの中に
鉄丸てつぐわんをもつてしよくすとも心穢人の物
をはうけしとしめし給ひけるもし正
ちきの心をさきとしてしんきやうをいたさん
人は末代といふ共りしやうとゝこほり有へ
からすほさつしんくをさきとして三所
のせいやくをあふき二世のしよくはんを
とくへきとの事也

得道已来不動法性示八正道垂権

迹皆得解脱苦衆生故号八幡大菩薩

和尚このもんを得てすいきして御す

いしやくのたつとき事おもふにかんるい

袖をひたす又大ほさつこの上人にはこ

付記

小稿は平成23年度科学研究費補助金基盤研究(B)並びに、
同佛教学特別研究費による成果の一部である。

(くろだ あきら 日本文学科)

二〇二一年十一月二日受理